
後宮近衛隊長の小間使い

湊美耶子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

後宮近衛隊長の小間使い

【Nコード】

N7202S

【作者名】

湊美耶子

【あらすじ】

異世界トリップして早10年。後宮近衛隊長のご主人様（女性）に拾っていただいてそのまま小間使いとして雇っていただけで、さらには腐な妄想に付き合ってもらってしまっただけで幸せ絶頂期な私ことルミですが、最近周囲に不穏な空気が流れております……結婚する？ え、ご主人様が？ え？ 私が？

【1】 小間使いのご主人様

我がユザド国のニコライ国王陛下（30）はそれなりに優秀でそれなりに美丈夫でございます。

それなりと言うしょうもない冠が付いてしまうのは、ニコライ陛下以上に優秀で、ニコライ陛下以上に美丈夫な王が他国に居るからでございます。

ディリトア王国のアンドレア王然り、カディナ王国のダヴィデ王然り。

我らがニコライ陛下も馬鹿ではないのでその辺は承知しているのでございます。

たまに、アンドレア王くらい優秀且つ美丈夫であれば……！ と愚痴る程、身の程を弁えているのでございます。

何故、それほど優秀且つ美丈夫になりたいのかは、ニコライ陛下と後宮近衛隊長（28）との会話で察していただけましょう。

「おはよう、エリザヴェータ！」

「おはようございます、陛下」

「そろそろ私の子を産んでくれ」

「嫌です」

「愛している」

「ええ、私もこの国を愛しております」

「そなたを愛している」

「ええ、この国の王であらせらる陛下のこともお慕いしております」

「じゃあ一人位産んでくれてもいいだろう!」

「その辺はお断りいたします」

何度も断られていると言うのに求婚いたします。

毎度振られても決して懲りないようなのです。

そしてこのような会話がほぼ毎朝あります。

ユザドの後宮ではいつものことです。

ぶつちやけ他国にも知れ渡っております。

ユザド名物『国王の求愛行動まんじゅう』とか出そうな雰囲気でございます。

そして近衛隊長はお名前で判るかと思いますが、女性でございます。そして若かりし頃の陛下の初恋の君でもあり、未だに恋焦がれるという侯爵家の一人娘なのです。

つつーか未練たらたらとうっぜーなコイツ……いえ、失礼いたしました。

今のは後宮近衛隊長エリザヴェータ様（愛称はエリー）の心の声を代弁いたしましたのです。

ですが権力で後宮近衛隊長にしてくれたこと自体はエリー様も感謝しているのです。

既に嫁き後れの年齢（失礼をば）とは言え、昔は社交界の花と謳われた母親譲りの失われ^{かんばせ}ない美貌の持ち主と言うわけでは無いのですが、それなりにお綺麗な顔と侯爵家の娘ということで隊長就任前まで求婚者が山のようにいらっしました。

一番面倒だったのが陛下のご学友兼現宰相補佐のヴァレリー様（30）の求婚でございます。

身分的にヴァレリー様は公爵家の方でありまして、エリー様から見れば一つ上の爵位ということもあり、釣り合いも取れますことから、公爵家の熱い説得という名の求愛行動もありまして、エリー様の御父母、つまりは侯爵家側の方が絆されて乗り気になりかかったところを、ニコライ陛下（当時は王太子）がエリー様を自身の妃達が住まわれる後宮の近衛隊長にさせ、結婚話をご破算にした訳でございます。

公爵家にお断りするお詫び文を作成するのが相当ご面倒だったと侯爵家の者は嘆いておりました。

この結果、陛下と宰相補佐との仲は亀裂が入りまくりで執務室では厭味の応酬だそうです。

幼少時からのご友人でなければ暗殺や寝取られ等のドロツドロの昼ドラ展開を見れましたものを……チツ。

「おはようございます、ニコライ陛下。本日も朝から後宮近衛隊長に迫ったようですね。彼女の仕事の邪魔をするなど何度も申し上げておりますが全くお聞き入れてなかったようで馬鹿ですか、アンタ」

「おはよう、ヴァレリー宰相補佐。もうアレは私の朝の挨拶として認識されているから、仕事の一部として彼女は認識しているよ、悲しいことにね。ってことで私の恋路を邪魔する馬鹿は馬に蹴られて鹿の角で挟まれて死ぬ、馬鹿はお前だ、馬鹿」

「ああ、可哀想なエリー。私の妻になっていましたらこんな馬鹿の下で働かされることもなかったでしょうに。私の屋敷で好きなように我が家の護衛や私の子を産んでくれれば子供の手習いの先生としても剣を持たせますのに。馬鹿の愛妾を守る仕事引き受けるなんて、

これ以上馬鹿の遺伝子を遺す必要など無いでしょうに。なんて可哀想なエリー……ああ愛し過ぎるっ！」

「ふ、その馬鹿に絆されて最近では子を産めと言っても回し蹴りをしてこなくなってきたぞ。あと数年経てばきっと私の子供を産んでくれるようになる！」

「回し蹴りだとっ！ 貴様、エリーにそのような振る舞いをさせる程苦しめていたのか！ 死ね、今すぐ死んでエリーに詫びろ、あと私にも詫びろ！」

「確かにエリーに私の愛は重すぎるだろうな、詫びても詫びても足りない自覚はしている。だから詫びない。エリーは私を有りの儘受け入れてくれればいいし、夜も褥で受け入れてくれればなお良い。だが、貴様に詫びる必要性など皆無ってかお前が死ね。お前の存在自体がエリーの心に哀れみという名の棘が突き刺さる所為で素直に私の求婚を受け入れられんのだ」

と、これが陛下と宰相補佐の朝の応酬でございます。まあ、エンドレスうざいので略させていただきますね。最近、エリー様はカモフラージュで、お二人が……男性同士で結婚したいのでは？ と周りでは噂になっております。一部の侍女たちがそりゃあもう大興奮でございます。

さて、エリー様の近況ですが、今現在のはあの朝の挨拶のように求婚者がたった一名だけなのですから簡単でございます。無理、嫌、面倒です、のどれか一言で済みます。

まあ、陛下は本気なのですけれども……。惚れた弱みか陛下は決して無理に迫ったり、手を上げることはしておりません。

まあ、徐々に絆す作戦なのかもしれませんが。

エリー様が悪女だったらこの国の行く末は恐ろしいことになっておりましたが、彼女にはそんな気も無く、まったりと陛下の愛妾たちと午前のお茶会を楽しんでおります。

「全く、こんなに美しい王妃と側妃四人が揃っているというのにニコライ様はエリー、エリーと……ウフフフツ……嫌だわ……最近笑い上戸なのよ……」

王妃のセシリア様（28）。

隣国デイトア王国の第一王女でいらっしやいました。
アンドレア国王は実兄です。

「仕方ありませんわ、陛下の初恋の君ですもの。聞くも涙、語るも涙……フフツ……つい、笑ってしまいましたわ、失礼いたしました」

側妃のカテリーナ様（24）。

ユザド国内の侯爵家の娘でございました。

「涙じゃなくて笑い話じゃないの…ププツ！ 駄目……私も笑っちゃう……！」

側妃のマリーヤ様（30）。

ユザド国内の伯爵家の娘でございました。

「笑いが止まりませんわ……エリー、それで陛下はどうなったんですの？」

側妃のフェデリカ様（20）。

隣国カディナ王国の公爵家の娘でございました。

「私も続きが気になりますわ!」

側妃のプリヘーリヤ様（16）。

ユザド国内の公爵家の娘でございました。

ちなみに側妃様たちはご結婚された順番でご紹介してございます。何故側妃が四人もいるかというと外交上の問題と国内情勢の問題故と申し上げておきます。

陛下はエリー様さえいらっしゃれば幸せになれる人間ですので、王妃様や側妃様方もソレを理解されてからご結婚なさいました。

「続きですか……えーと……どうだったかな。ああ、そこでヴァレリー様が出張ってくるんだが……聞きたいですか?」

「……ええ!」「……」

「ヴァレリー様は陛下が君と一緒になったらこの国は終わると言っ
て、私に求婚してきた。私には彼の真意がよく解ったよ。私のよう
な半端者は陛下にふさわしくないとねっ! 陛下にふさわしいのは
この優秀なご学友であるこのヴァレリーだけだ! と目が言ってい
たのです」

「……キヤーツ!」「……」

「お互い男性である陛下とヴァレリー様は想い人と結婚できない身
を犠牲にし、せめて陛下をエリーという名の悪女からお守りしよ
うと決心したという。ヴァレリーが女だったら良かったのにと陛下の
ご親族も語っていたような気もいたします」

ということでは陛下と宰相補佐のあられない噂を流しているのはエリー様でございました。

エリー様は腐女子という奴でして、そりやもう陛下のことは受^{うけ}として見ておりません。

攻^{せめ}と認定していらつしやるヴァレリー様と陛下の特に夜を悶々と妄想して楽しんでいるのでございます。

妄想だけでは飽きたらず、根も葉もない陛下と宰相補佐の妄想上の会話を実際にあつたかのように王妃と側妃に吹聴するトンデモネー悪女なのでございます。

「でもエリーをカモフラージュに使うなんて、私、女としてソレは嫌ですわ。ニコライと宰相補佐との逢瀬を私もそれとなく応援いたします。絶対に邪魔などいたしませんわ！　そうすればエリーが悪者にならないし、愛しい殿方との逢瀬がいつでもできるでしょう？」

「お気遣いありがとうございます、王妃。私の愛しい方はいつも隣にいてくださいますので逢瀬の必要などないのですよ」

「まあ！　いつも隣ですって？　誰なのエリー！？　今日こそ教えて頂戴！」

「どうやらエリー様は既に恋人がいらつしやるようです。

誰でしょう、愛しい人と仰っていますので性別が断定できませんね。女の人でしょうか、百合ですかっ？！」

「フッフ、そうよ、そろそろ教えて頂戴。まさかニコライ陛下や宰相補佐ではないんでしょう？」

側妃達が身を乗り出して聞き出そうとしております。

「私が拾ってきた小間使いですわ」

小間使いとは身の回りの世話をしてくれる女性で、侍女と呼ばれる方よりは下のお仕事をしている方です。

侍女がしない力仕事、洗濯等が主な担当ですね。

「……えっと、アーラのことですか？ それともルミかしら？」

王妃様達は一瞬固まりました。

小間使いは女性ですから仕方ありません。

え、こいつ腐女子兼百合かよ！とでも仰りたいのでしょうか。

「アーラですわ、一応本名はアラムと言いますのよ」

「失礼ですけど、アーラはルミより……いえむしろエリーよりも女らしい女性ですわよね？」

「ええ、拾ってからずっと女装させてますからね。男の格好なんてさせたこともありませんわ」

（（（（女装ですって！ アーラはちゃんと男なのねっ！））））

「その……恋仲になった経緯は……？」

「経緯ですか？ 男の本能に抗いきれなかったアーラを可愛いと思って受け入れてしまった……む、陛下が来る時間帯ですので失礼いたします」

尻切れトンボなお話になってしまったエリー様が退出して数分後、陛下が嬉々として妻達の揃うお茶会の席へと歩みを進めてきました。例に漏れず宰相補佐様も仕事をしりと口を出しつつ、いらっしやいます……オメーも働いてるよな。

「ん？ どうした？ またエリーは私が来る前に退席か。愛^うい奴め、何故私が来ると分かってしまうのだ」

「臭いんじゃないですか？ 陛下の体臭が」

王妃の前でもお構いなく、宰相補佐の厭味全開って……、キツタネーなお前。

「お前の体臭の間違いだろう、金魚の糞め」

負けじと陛下も厭味攻撃でございますが、一国の王ともあろうお方がそんなみみっちい台詞とは情けない……。

「陛下も宰相補佐も可愛さが足りなかったのかしら……」

王妃様達はそんなイチャイチャ喧嘩する陛下と最初補佐を見て、ため息をつくのでした。

王妃様達も陛下と宰相補佐が本気でエリー様を愛していることを知っておりますし、恐らく当事者であるエリー様ご本人様もお二人から真剣に愛されておりますことを理解してはいるのです。

ただ、運命の赤い糸がお二方とのどちらとも繋がっていなかっただけなのです。

「ただいま。アーラ、ルミ」

「お帰りなさいませ、エリー様」

「ふふ、王妃様達にアーラが男だってバラしちゃった」

「ええっ！」

「陛下達が嗅ぎ付ける前に子作りしとこうかなあ。先日父上には言っておいたよ。私が当主になるとね」

エリー様は一人娘のため、侯爵家自体がそもそも陛下や宰相補佐の求婚について乗り気ではなかったのです。押しに弱い家系なのか宰相補佐との結婚はあとちょっとのところまで進んだようですね。

私はその頃拾われたばかりでよく分かりませんでした。

「と、当主様になるのですか……」

「条件は跡を継ぐ子を成す事だからね。子種は誰でもいいんだけど、私は君の子種が欲しいな。君とならきつと可愛い子ができるだろうね」

と、エリー様は完全にアーラだけ見つめております。アーラもアーラですつとエリー様しか見ておりません。完璧仲間ハズレです、私。

「エ、エリー様っ！」

アーラが声を荒げます。

興奮してんなよ、若造が。

ってアーラは私が拾われる6年前に、その辺にうち捨てられていた赤子だったのですがエリー様が拾ってきました。

エリー様は拾い物（者）がお得意です。

なのでアーラはまだ15、6歳です。

「こんなこと私に言わせて夜までお預け状態と思うの？ アラム？」

アラムはアーラの真名です。

お二人がイチャイチャするときにしか呼びません。

「はうつ……ど、何処を触って……！」

「何処って……可愛いアラムの息子」

息子とはナニでございます。

察してくださいませ。

女にはついてねえアレだよ……でございますよ。

「エ、エリーさまぁ……」

えーん、下世話なことは申したくありませんが、昼間っからサカッてんじゃねーっ！

この国の上層部駄目すぎる……。

おっと、自己紹介が遅れました。

私、若い頃に日本から異世界トリップしちゃいました鈴木留美すずき るみと申します。

倒れていたところをエリー様に拾われて、拾われ仲間のアラム君と一緒に小間使いとして働いております。

え、私のロマンス？ 無いよ、そんなモン。生きるのに必死でしたもの。

もう拾われて彼此10年経ちました、私ってば多分28歳です。この先、エリー様とアラム君のイチャイチャ見ながら一生過ごすんだと思います。

多分一生喰いっぱぐれることはないし、幸せかなあ……。

「ルミ？ 何時までソコで突っ立ってるの？」

「あ、ハイ。失礼いたしましたっ！」

ポヘーツと二人を眺めていたルミにエリー様は声を掛けます。

「洗濯、アーラの分までキッチリやつといてよね」

ルミがもう聞いていないだろうに畳み掛けるように声を掛けます。ルミが出て行った後、ベッドに腰掛けたエリー様はごそそとベッドサイドの机の中から書類を取り出しました。

「ってことでアーラ……ルミの結婚相手はどれがいいと思う？」

「へ？」

その書類をまとめて手渡されます。エリー様が出した書類は男性のプロフィールが書かれておりました。

「お前もルミも私が拾ったんだから最後まで面倒見てやらないといけないだろ？ お前は私が面倒見るからいいけど、ルミは気も利くし、小間使いで終わらせとくのも勿体無い気がする。有能な奥方になれると私は踏んでるんだ。ルミの夫候補を職人の中から四人ほど用意したんだが、どれがいいか悩んでいるんだ」

どうやら我らがご主人様のエリー様はルミを結婚させる気マンマンのようです。

ルミはエリー様に拾ってもらえて幸せだからこれ以上は望まない、ニホンという国に帰りたいとも願わないと言っていた。

一生この国で、エリー様とあられもない噂話を肴にお喋りしながら暮らすことを彼女は望んでいる。

でも、そんな平穏な一生にはなれないようだ。

拾われ者は拾われ者らしく、ご主人様の命令に従うべきか……。

僕は勝手にご主人様に発情しちゃった訳だけど……。

エリー様自身はホントに子供作るだけで結婚はしないのかな……。僕が存在が邪魔になったらなら直ぐ出て行かなきゃ……。

いや、それよりもルミの今後はどうなるんだろう……。

良い人と結婚させてもらえればいいけれど。

【1】 小間使いのご主人様（後書き）

誤字修正。

エリー様つてば団長になつてた箇所がありましたよ。

エリー「作者のミスだ、私は悪くない」

ルミ「作者を死刑にします、エリー様！」

……っ、冷たい。

【2】 男の娘（二）の眩き

ルミがニホンと言う名も知られていない小国からユザド国に来たのは10年前。

エリー様が城から自宅に戻る途中の大きな車道で倒れて気絶していたルミを拾った。

詳しく説明するとエリー様は魔移車に乗ったので倒れている人影を見つけて運転手に車を止めさせたらしい。

ただ、倒れていたルミ本人は知らない間に倒れて気絶していたのだと言つたため、詳細は一切不明。

エリー様がルミを連れ帰つて来た時は、当主様（エリー様のお父様）が屋敷内に置いておくのを大反対して大変だった。

家族の元に返そうと氏名を聞くと、スズキルミと名乗り、氏がスズキで、名前がルミで、ブエルノ帝国で貴字と呼ばれる文字で鈴木留美と書いた。

ブエルノ帝国の者かと問えば違う、ニホン人と言い、職業は？と聞くとコウコウセイと答えた。

コウコウセイとは何か？と聞くと、コウコウセイを知らないの？ハイスクールスチューデント。と答えた。

何処から来たと問えばニホンと答え、何しに来たと聞いた時はこちらが聞きたいくらいだと返した。

幸か不幸か最初から会話は普通に通じる。

たまに耳慣れない単語を口にするが、ルミはユザド語を流暢に使いこなしている。

尋問が終わるとエリー様の実家であり、僕達の奉公先であるジュラスフキー家お抱えの魔術師が少なくとも彼女は嘘はついていないと答えた。

ルミの世界ではデンキとやらを使う嘘発見器と言われるらしいが、嘘を言っているか本当の事を言っているかを判別する魔術虚言探知機が嘘であるという反応を示さなかったのだ。

ただ、年齢を聞かれたときに、18歳と答えた時だけはエリー様ですら嘘だと思っただけらしい。

コレは本人には永遠に秘密である。

嘘をついていないからと言うだけで家に置いてもいいよとなるわけも無いが、考えても結果が出ないなら研究材料としてとりあえずここに居れば良いんだ！ とエリー様の強引な判断でルミはエリー様専用小間使い兼魔術師の研究材料として生活することになった。

来た当初のルミは一人きりになると居場所が無く、プルプルと身体を震わせていたり、突然家に帰りたいと泣き出したりと情緒不安定だった。

五月蠅いと当主様に勝手に殺処分されないように、ルミが屋敷内にいる時はずっとエリー様が連れ添って身体を張って守っている状態だったのが、エリー様に異常なまでに懐く一因である。

ただし、当主様は未だにルミの存在が不安の種のようなのである。

たまにエリー様とルミの件で小競り合いをするのだが、歳の所為か愛娘にやり込められている。

とりあえず手渡されたルミの夫候補に真剣に目を通そうと……したいのだけれど、如何せん僕の息子をエリー様がサワサワしているので非常に集中できない。

「えっと……と、とりあえず息子から手を離していただけると……」

嬉しいのですが」

「おお、スマン、スマン。で、どれがいいと思う？」

エリー様が僕のスカート越しの男の象徴から手を離すのを視認してから書類に目を通す。

ルミからニホンの教育制度を聞いたエリー様の方針で僕たちジュラスフキー家の使用人全員が他の貴族の使用人よりも標準以上の高い教育を受けている。

自国語のユザド語以外にも公用語であるデイリトア語は流暢とまではいかなくても日常生活用語程度なら話せるし、読み書きもできるのだ。

普通は自国語の読み書きまでが精々である。

税金計算などしない。

これは洗濯業務だけという客人と会話をしないような小間使いであっても例外ではなく、税金の計算や文字の読み書きを習得させられる。

最もルミはデイリトア語を、これニホン語だと特に苦労せず、難なく第一外国語を習得していた。

帝国語も貴字ってカンジと同じじゃん……とあっさり第二外国語まで習得していた。

第三外国語まで行く前に税金計算が必須ということで少々梃子搦っていたようだがなんとかクリアした。

彼女は語学に関しては全く苦労していない。

実際第三外国語まで習得したのは、勉強嫌いだからもういいよと零した為、不明である。

もっとも日常においてソレが生かされる機会は稀であるが、女性の場合は家事はモチロン語学や税金の計算が出来たりする所為で語

学と金勘定に疎い職人の妻として寿退職していくときがある。

大半がその後様子を見に行くと妻が財布をきっちり握っている力力ア天下とやらで幸せ（？）に生活しているようだ。

男性陣の場合は別の貴族のお屋敷に引き取られ、家令（執事長）として活躍できる。

大抵は現在の勤め先である侯爵家のジュラスフキー家から頂戴する給金より上にならないといけないため、引き取り先の大半は公（侯）爵家である。

ココ10年程でそんな歴史が作られた所為で、最近大貴族達からジュラスフキー家の使用人達は評判が高い。

その中でもルミはエリー様のお気に入りだが、小間使いと言う立場のため人前には出てこない。

なので知名度は無く、堂々と欲しいと言う人はいない。ただし、使用人達の間では今では絶大な人気を誇る。

それは何故か？ 不思議キャラだからだ。

人の恋路は好きだが男性同士限定とか、エリー様を最初にオスカル様！ と呼び、名前が違うことがわかったとオスカルに改名しませんか？ とわけのわからない提案をしたのである。

あとは男性同士の恋愛をビーエルと言うんです。乙女はそれだけで生きていけるんですとか、女が必要ない世界を永遠に語る子なのである。

で、語りに語った挙句、ってそれ女の実在意義なんやねん！ って突っ込みいれさせてもらっていいかな？ いいとも！ というオチでまとめた過去がある。

そのノリが不思議なわけで。

当初はかなり現場が混乱したものである。

この世界は魔法が使えるという事にも驚いてたけど、使い方を教

えた結果、今では彼女も自由にある程度の家事魔法を使えるようになった。

さて、そんなルミの相手方候補達は書類上の紹介のために容貌の特徴は書いてあるものの、実際の顔はどんな顔か分からない。

そもそも僕達小間使いは家令や侍女とは違い、あまり人前に顔を出さない。

その中でも僕はエリー様曰く秘蔵っ子の為、恥ずべきことだろうがジュラスフキー家お抱え職人の顔すら知らなかったりする。

しかし、お見合いの最重要項目である稼ぎ（収入）は貴族御用達の職人（の弟子）だったりするので全員合格。

いまいち良い夫の基準が分からないが収入の面だけ考慮して答えることにした。

「私にはよく分かりませんが……見る限りでは随分良い物件です……よね？」

物件という言い回しはアレだけど、書類上の男性全員、悪いことでもない限り生活苦にはならないどころか、ルミが働かなくてもいいくらいの稼ぎだと思う。

僕が思ったことを言うと、自信有りげにエリー様は胸を張って答えた。

「ん、そうだろ。一応身分はハッキリ明示して本人同士さりげなく紹介してあるし、お互い好印象なんだぞ」

「じゃあ勝手に結ばれるんじゃないですか？」

「む、流石に四人全員と結ばれるのは豪勢過ぎる」

流石にソコまでは言っていない……。いや、でも有り得るかも。

ルミ本人は実際モテるとは気付いてないけど、地味に執事の息子（後々の執事候補）とか料理人に人気はあるんだよねあ。

放っておいたら四人と結ばれて泥沼愛憎劇繰り広げたりして。

本人もそんな展開好きだし、ただし男同士に限る……。だけど……というか本人に恋愛とか結婚願望無いし……。うん、無いな。

「誰も全員とは言っておりませんよあ……。というか好印象も何もそもそも貴族であるエリー様の顔前で失礼な態度取るわけないでしょう」

「ふむ……」

エリー様は下を向いて考え込む。

多分碌な事考えてない。

「うつつ……ルミは発言を除けば慎ましく控えめな印象ですし……あまり無理な事はしないほうがいいと思いますけど」

というか本人は心がもうオバちゃんと言っていた。

二ホンは365日で1年らしくて、もう此処で10年生活をしている所為で二ホンで考えれば50年分ぐらい生きてしまったから、もう私は枯れたと言っていた。

オバちゃんはそういう話が好きなものだが、当主様には子がエリー様しかいないけれど愛人が複数居る事を知って眉をひそめたりしていたし、単に結婚や恋愛に良い印象を持っていないようである。

帰りたいと騒ぎ出させないためにも彼女の過去や家族はあえて聞か

ないでいるが、彼女自身話し出したりもしないため、ルミの家族に対する希薄さはエリー様も知っている気がするのだけど。

「でも私の人格形成に多大な影響力を与えているぞ。私の話す陛下と宰相補佐の関係が妖しいと言ったのはアイツだし、最終的に私が腐った女になったのもアイツの所為だし、責任取ってもらわんとな結構強かな性格なんだぞ」

強かってか……うん、狡賢い……たまに上手くサボってるし。
仕事でヘマをして僕達が怒られてる時、上手く立ち回って結局自分^{ルミ}の評価上げてるし。

「……うわぁ……思い返すとルミの性格って結構狡賢いかも……」

あ、腐った女とはビーエルという所謂男同士の恋愛が大好きな女性のことらしい。

ルミの世界ではフジョシと言っらしいが、そんな単語を生み出すほどあっちの世界では存在を確立させてるんだねビーエルって、凄いや。

僕は女装はしてるけど女の人が好きだな。

っていうか女装はエリー様の強制だからね。

最近骨がミシミシ言っし、ルミ曰く成長期ってヤツだから女装させるのはそろそろ止めてくれないかな。

エリー様が腐ったのは、ルミが陛下と宰相補佐の掛け合いなんかを見て、面白そうにあの二人恋人同士ですか？と聞いたのがきっかけ。

エリー様はルミが楽しそうに妄想してるのを見ていたら、自分も妄想する事が楽しくなっちゃったらしい。

「だろう？ 私的にルミは言動を除けば健気受ポジションだから、ぱつと見が鬼畜攻なヴァレリーがお似合いかと思うんだ。が、流石に公爵家に小間使いを嫁に貰えとは言えん」

「はぁ……（意味が分かる自分が悲しい）」

確かにルミの見た目は小動物っぽい。

身長もそんなに高くないし……というかこの国の女性の平均身長より2寸（約6cm）程小さい。

黒くてつぶらな瞳に黒い髪、陶器のような肌でなんとなく神秘的なんだ。

でも言動が残念。

ある意味エリー様の師匠だし。

「ってなことでその辺の職人の嫁としてもらってやって欲しいわけだ。できれば見た目鬼畜攻キャラっぽい奴」

相変わらずこのご主人様も腐ってる。

自分のお気に入りの小間使いの夫に鬼畜性を求めるなんて……もし、エリー様が男性だったらルミの事拾ってから速攻で拒否権無しで愛人にするんだろうな。

この溺愛ぶりだともう拾われて10年だし、子供も4、5人出来てそう。

うわぁ……思わず想像しちゃった……男性版エリー様。

元々騎士の格好をしてるから見た目がちょっとごっつくなるだけかもしれない……そしてニヒルな笑みとか浮かべちゃうんだ。

「鬼畜……」

つい言っちゃった。

うん、まあ、どっちにしる格好いいとは思いますが。

ご当主様も顔が良い所為でモテるからな。

今、愛人というか肉体関係ある女の何人いるんだか。

「まさか小間使いを貴族の正妻には出来んだろうし、いや、逆にルミも愛人の方が気楽でいいと思うだろうか……うーん、でもやっぱりこのバルウキン家のイグナート君がお勧めかね。服飾工の」

聞いてないようだ。自分の世界に入り込んで。

「お好きにどうぞ……あと息子から手を離してください……あと見た目鬼畜って……」

「おお、またニギニギしてしまったか、スマン、スマン。いやあ……何か自信無さそうにプルプルしてるのを見てると苛めたくなくなるというか庇護欲そそると言うか……うん、やっぱり一番は鬼畜系見た目の内実が溺愛一方通行がお勧めだ」

「……無駄に設定細かいですよ、ソレ。その見た目鬼畜な宰相補佐にそれとなく相談してみるといいのは？」

もうコレは宰相補佐様に押し付けよう、そうしよう。

僕じゃ止められない。

あ、でも、ニギニギは止めてください、ご主人様。

「ん？ ソレも面白そうだな。よしそうしてみよう。女の身体になつてる……そんな……！ どうしてだよ、女装はしてたけどなんで女に！ っと」

ん？ 女の身体になつてるとって何だ？

何を書き付けてるんだ？

「って何書いてるんですかぁ！」

「うん、新作の小噺ネタをまとめとかないと」

「あ！ 巷で人気の王と宰相補佐のアレって……まさか！」

「作者は私だ。ルミにも好評で嬉しい限りだよ。まあ、次の次の小噺内でルミは男に変換してるけどな、あとちよつとで出版できそうだぞ。相手役の近衛隊長がまた変態キャラでな。女装男子を友人の魔術師、モチロン男だぞ、の魔法で女体化させて……と、今後の展開について悩んでるところだ」

何だ、ソレ？ 止めないと男三人で幸せにとか言い出しそうなオチだな。

「もっと普通のモノ書きましようよ……」

「普通のモノはディリトアの奴が書いてるから。カグヤとミカド王子が大ヒットで演劇化するしな」

「ああ……カグヤとミカド王子……そういえばルミが気にしてましたよ？」

二ホンにも『竹取物語』なる『かぐや姫』というお姫様が出てくるお話があるって、ルミがこの前ポツリと言っていた。

「ん？ 男女モノなのか？ では今度チケットを買って一緒に見に行つてやるとしよう……いや、見合い相手と一緒にいいかな？」

「あ、いえ、カグヤ姫は日本人なら誰でも知ってるお姫様だから、と」

求婚してくる男のあしらい方が無理難題を押し付けると言う形のために二ホンの話と同じで気になるらしい。

もともと二ホンのかぐや姫は結婚せずに元々彼女の存在すべき国に帰ったとのことだが。

「……それは二ホン人がディリトアにいるということか？」

エリー様は眉をひそめる。

どうやらルミ以外の二ホン人が存在するのが気に食わないらしい。

「その可能性があるかもしれないと……ルミは考えているようです」

かぐや姫を自分と重ねているのだろうか？

夜、たまに星を見ながらルミはため息をついている。

「拾ったモノをどう扱おうと私の勝手だな、うん。さっさと結婚させよう」

エリー様つてば……二ホんに帰してあげる気そもそも無いもんなあ……帰してあげる技術も無いけどさ。

それにしてもご主人様は何が狙いなんだろう？

【2】 男の娘（こ）の眩き（後書き）

今回はアーラ視点。

男の娘にサブタイトル変更。

色々考えてるとセクハラご主人様にニギニギされるので止めときなさいと言いたい。

次はエリー様視点がいいです（いいですって何だ）

【3】 ご主人様の思惑（前書き）

2話でお気に入り200件突破しました。

ありがとうございます。

これからエロエロになるよう頑張ります……え、エロエロ駄目？
そっか、じゃあラブコメで。

【3】ご主人様の思惑

私が18歳の時、日々辟易しながら過ごしていた。結婚がどうの、跡継ぎがどうの、と当主である父から我が侯爵家のためにも……と散々聞かされていたからだ。

そんなある日、面倒な求婚者でありながら親友へと私は思っている)でもある当時王太子であつたニコライの計らいで後宮近衛騎士として王城で勤務し始めた。後宮近衛騎士は城に間借りをして暮らせたから、父の小言を聞かなくてもよくなつてニコライに感謝はしたが、ソレとこれとは別で求婚は断つた。

そんなある日、父の呼び出して仕方なく久々の実家への帰省の帰り道、私は運命的な出逢いをした。

一人の女の子が淡い金色の光に包み込まれて、馬車の中、私の膝上に突如現れたのである。

大貴族である侯爵家出身の私が相乗りなぞするはずもなく、更に御者は馬を操るために外にいたので、馬車の中には私しかいなかった。光は私が彼女を抱え込むのを待っていたかのようにあつた。

目の前の光景に何も考えられなくなつた私はほぼ無意識に優しく少女を抱え込むと、光は柔らかく瞬いて徐々に消え去つた。

御者は中の異変など知らず馬を操っている。

私は魔術師として研究したわけではないから詳しくは語れないが、少女の現れ方は異常だった。

人が突然現れる事自体は魔法を使えば確かに可能だが、目視ではあるが近辺に術者はいなかった。

誰かが魔法を使うと魔動力が高い人獣^{もの}は魔法を使用した事を感覚的にわかるが、私の感覚的に術者の存在は無かった。

周囲に魔方陣無し、精霊が協力してくれるのであればやはり感覚的に解るし、精霊自体が知らせてくれることもあるが、高確率で精霊の協力無しでルミは出現した。

今（10年前も現在も）の技術では不可能な業^{ワザ}だった。

そもそも人体召喚魔法を遠隔操作が出来る魔術師など聞いた事も無いし、何故私の目の前に寄越すのかも一切意図が掴めない。

だから、この事は誰にも（召喚されたであろう本人にさえも）言っていない。

道端で拾ったことにしている。

よくよく彼女を覗き込むとユザドに住む人種とはかけ離れた容姿をしていた。

少し癖のある長い黒髪、黄色みあるがすべらかな肌は陶器に似ている。

瞳はどんな色なのか、気絶している振りかどうかの確認のためにも下^め瞼を捲る。

濃い茶、黒に近い。

いったい何処から来たのだろうか……？

彼女が起きたらいろいろ話しかけたかった。

……そもそも言葉が通じるのだろうか？

ユザドは金や銀、桃色、淡い緑等という薄い毛色と薄い体色が総じて多数派を占める。

私自身も金髪で癖のある巻き毛を頭上で纏め上げている。

うん、とか細い声が腕の中から聞こえた。
彼女が起きた様だ。

私は努めて優しく声を掛けた。

「おはよう、お姫様」

自慢にもなりはしないが、あまりに突出した美貌でも無ければ、
不細工さでも無い。

男装の麗人ともてはやされるが、別に男装しているわけではない、
職業柄騎士服コレスを着るしかないのだ。

女性にモテるのは自身の性癖が関係してくるため嬉しいが。

「おはようございます……？」

言葉は通じた。

無事、コミュニケーションを取れそうで安堵した。

「私は、エリザヴェータ。君のお名前は？」

優しく、優しく怯えないように細心の注意を払って私は問いかけた。

「鈴木留美……名前がルミ？」

「ルミか……いい名前だ」

いや、当初は意味全く解らなかったのだけれど。

後日、『美びが留たまる』と言う意味だと知った。

やはり素晴らしい意味があったのだった。

どちらかというとルミ自身は可愛いの塊だが。

この際なのではつきり言わせてもらうと、私は同性愛者である。男性に興味は無い。

幼少時より女性にしか恋をしたことがなかった。

といっても初恋は幼少時に女装させられたあの人（つまり男性）だが、その辺は彼の名誉のために秘匿しておいてやる。

まあ、何かの拍子で言ってしまうことがあるかも知れないが。

好みの系統で言えば、特にか弱そうな守ってあげたくなるタイプにめっぽう弱い。

その点で言えばルミは完全に私の直球・ド・ストライク（ルミ曰く好みの人・物に会えたら言う台詞）だった。

私のルミに対する情は完全なる愛情であり、彼女が目を開けた時がまさしく一目惚れの瞬間というヤツだった。

ルミに言われてショックだった台詞がある。

「エリー様の立ち位置で男性だったら、私みたいな召喚されてきた子に一目惚れして最終的にモノにしちゃうんですよ。それが二ホンの物語の王道なんです」

自身が女である事をこれほど後悔した時は無かった。

どうして私は男として生まれなかったんだろう……。

彼女は男性同士の同性愛に興味があるため、女性として女性を愛するという事に、嫌悪感はないが、興味も無いと言う。

女性である自分自身がその恋愛模様の対象に入るからじゃないだろ

うか、私は恋愛する気は無いし、と分析していた。
恋愛する気は無いとは言っても、色事に興味がないわけではないらしく、他人の恋愛話は小間使い仲間と楽しそうにおしゃべりするらしい。

同性同士で合法的に結婚できる法は今のところユザド国内外問わず何処にも無い。

法によって同性愛自体が禁止されるとか刑罰を受けるとかそういうものは無いのだが、所詮マイノリティというやつで、理解されない事も多い。

法を変えようかとも思ったが、私にそんな力は無かったし、頼みの宰相補佐にはなんの冗談だと思われて、しつこく言い続けたら怒られた。

「エリー、同性同士で結婚して何になる？ 生殖活動が出来ないんだぞ、国が減ぶだけだろう？」

……ホントに私の事好きなのかお前？

さりとて愛人にしようにもルミ本人にそんな気は無い。

無理やりモノにしようにも女性同士……指テクで喜ばせる技術も持ち合わせてるし、最終段階までモノにするためのブツはあるにはあるが（日本語で言う大人のオモチャとやらである）そんなもん使用して泣かれて嫌われて何処か遠くに行ってしまうのは嫌だ。

せめて男性^{ビエル}同士だったらまだブツが双方に……嫌よ嫌よも好きのうち……最後は気持ちよくしてや……いかん、いかん、涎が出てきた。

そんな感じで私も現実逃避込みでビエルとやら乙女の仮想世界にハマって行った訳である。

ただ、ルミとは違って普通の男女モノでも私が男になったりと仮定

して楽しめるタイプなので、その辺は彼女と別な生き物として思考が働いているのだと痛感する。

ルミを結婚させようと思った切っ掛けは結構単純な理由だ。彼女にこの世界に留まるための枷かせを作ろうとしたからである。

今はまだニホンとやりに帰ることは出来ない状態だが、いつ何時帰れる状況が来ても可笑しく無い。

10年ほどルミとべったりまったりと、ある意味ぬるま湯に浸かっていた状態の私はようやく気付いた。

彼女に子供が出来れば、ニホンには帰らずに留まっていってくれるのではないかと。

陳腐だが、私は主人と使用人の何時切れるか分からない関係ではなく、彼女と夫婦は無理でも、家族になりたいと思った。

そうして更に閃いたのである。

私達が家族になるには自分の子供とルミの子供を結婚させればいいと。

彼女と義理でもいいから家族になりたい、そのために自身と彼女の子供が必要である。

そう考えてから私は二人分の子種の基である男性を準備する事にした。

まず一人は私の小間使いアラムである。

言っては悪いがアラムはルミに対するカムフラージュ、スケープゴートである。

私に愛欲の感情が芽生えた彼には申し訳ないのだが、とことん利用させてもらってポイ……はしないが、一応子種を貰ったら最期まで面倒見てやる所存だ。

父には子供さえ作ればいいだろ、この色ボケジジイと説得（罵倒）

して私が子供を産んでから時期当主になることで私の結婚自体諦めさせて収めた。

二人目はルミの相手である。

子供同士の結婚に障害が少ないこと。

貴族の愛人や正妻が良かったが、正妻は小間使いでは無理だし、愛人なんて中々おおっぱらに募集する人間がいるわけでもなく、すぐ頓挫した。

ウチの色ボケジジイ（父親）はどこから愛人を見つけてくるんだろう。

そして何故そんなにもいるのに（判っているだけで12人）子供が私しかないんだろう……。

うん、なんとなくは分かっているけれど……。

本題に戻して、一瞬ルミの相手として王であるニコがいいかと思っただが、私本人以外はもう妻は要らんと豪語しているので早々に諦めた。

そもそも小間使いが側妃になったことなど歴史上あっただろうか、いや、あった。

……けれどあらぬ疑いを掛けられ処刑されてた気がする。

駄目だ、やっぱりニコは駄目だ。

結局、貴族の愛人はとある人物だけを用意して、ウチの御用達職人工（の弟子）の嫁にする案を考え付いた。

子供同士の結婚はまず無理だが、ルミを手元に置いておくのは可能だろう。

ウチの使用人達は嫁に行くと内助の功で評判が高いから直ぐ候補は上がってきた。

ただ、内助の功と言われているだけに職人である夫と共に家にいる

生活を送る事になるため、些かどころかかなり不満である。

私の見えないところでイチヤイチヤイチヤするのは……いや、見合い結婚だし、夫婦愛とか無くてイチヤイチヤしないかもしれないけど、やっぱり腹立つ。

だが、背に腹は変えられぬと言う事で見合いの書類を準備する段階まで来た。

貴族の愛人として生活していくなら、希望として私の家（侯爵家）と釣り合うか、それ以上（公爵家）の家柄である。

それ以下はなんと言っても折角産んでもらった子供の結婚に障害が出る。

良くも悪くも私の身分は高いのだ……。

侯爵（次期）当主の子息が（仮）男爵家の愛人の子息を貰う……男爵家は超喜ぶんだがな。

侯爵家の私の親族が黙ってはいないため、穏便に済ますために釣り合うかそれ以上が良い訳だ。

用意した候補は言わずもがなヴァレリー（公爵家出身）、我が国の優秀なる宰相補佐君である。

彼は30歳にして未婚で、愛人一人すらもない。

私に懸命に求婚している為と、陛下とのほぼ毎日行われる愛憎劇のちわけんか所為だ。

私の見かけが男装の所為か、昔からちらほらと言われてはいたのだが、彼は周りに男色家だと思われている。ハモ

ルミには誠に残念だが、彼は異性愛者であるようで、噂が上る度に静かにキレて仕事に逃げている。ノンケ

彼は公爵家当主の座を叔父に譲り、このまま宰相の地位まで上り詰める気にいる。

まあ、既に宰相補佐なのでゴールまであと1段なんだが。

ということでルミの言うエリート官僚とやらのルミを愛人にして欲しいとこれから頼み込むつもりである。

これが駄目なら仕方ないので職人の妻として売り込む算段だ。

【3】 ご主人様の思惑（後書き）

エリー様視点。

とりあえず登場人物全員思考回路残念系作品。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7202s/>

後宮近衛隊長の小間使い

2011年5月26日21時10分発行